

※文字の大きさは Meiryō UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。  
 ※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、(写真1) (表1) などと文中に記載し、右ページに(写真1) (表1) などと表記の上、貼り付けてください。  
 ※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は変更可能です。  
 ※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

**エントリー学校名：** 北海道室蘭市立白蘭小学校

**活動名：** 全国学テ結果分析後の取組～苦手分野の実質的な克服を目指して～

**解決すべき課題：**

- これまでの勤務校では、全国学力学習状況調査の結果分析は入念に行うものの、それが担任を通して、何らかの取組がなされ、児童の課題克服までには至っていなかった。
- 分析を基に、学校全体として児童の課題を共有し、実質的な取組を行うことで、課題克服を図りたい。

**目標・方針:** 児童の苦手分野を職員全体で共通理解し、実質的な指導を通して苦手分野の克服を図る。

P：苦手分野を、教職員で共通理解を図る。  
 D：苦手分野の授業を充実させることで児童の理解を深め、確かな力を育む。  
 C：単元を振り返り、定着状況を把握する。  
 A：定着状況を、翌年度の当該担任に伝え、同系統の指導に役立てる。

**活動内容：**

P：全国学テの結果を S-P 表を基に分析。→「量と測定」領域に課題。  
 「量と測定」領域を、本校児童全体の課題とする。(職員会議で学習指導要領を基に共通理解)

D：「量と測定」領域で後期に学習する内容を**重点単元**と設定し、指導を充実させる。  
 担任の負担を増やさず、**担任外が積極的にサポート**することで、指導の充実を図る。  
**【重点単元の具体的な指導】**  
 ア) レディネステスト：**担任外が採点**し、課題が大きい児童には**補充学習**を行う。  
 イ) 2名体制での授業：重点単元では、全時間、**T2**を配置する。  
 ウ) 単元未定着学習：テスト前最後の練習の授業では、**担任外が担任と相談して準備したプリント**を使い、たくさんの問題に触れる。また、大人をさらに2名増やし**4名体制でサポート**。

C：①**担任外が単元テストを採点**し、児童個々の定着状況を把握する。  
 ②単元テストの結果から、定着が低い(指導が不十分、あるいは難しい)内容を洗い出す。  
 A：上記のC①は、集団の学習状況として、翌年の新担任に引き継ぐ。また、  
 上記のC②は、その単元の指導状況として、翌年の同学年担任に引き継ぐ。

**活動の成果：**

【児童】・全学年において、重点単元では、テスト会社設定の期待点数を上回った。  
 ・単元末の授業後、複数児童から「近くに先生がいたから、分からない問題を聞きやすかった。」

【職員】・「量と測定＝本校の課題なので、重点単元でなくても、量と測定の際は『よし、やるぞ!』となる。」  
 ・「新しいことをやろうとすると、負担が増える印象があるが、この取組は、むしろ負担は減った。」

**アピールポイント (アイデアや工夫)：**

- 全国学力学習状況調査は、どの学校もせっかくだから、分析止まりだと、勿体ない。しかしながら、担任の負担が増えては、児童にとってかえってマイナスになりかねないので、担任外がちょっとだけがんばると効果的。
- 学校全体が大きく変わるわけではないが、児童の苦手分野に実質的なアプローチを行うことで、着実に苦手を克服できる。「実質的に」が、とても大切。
- 単元を通して、T2が入ることで、T1の指導の意識が高まるという付随的効果もある。

Plan

↓

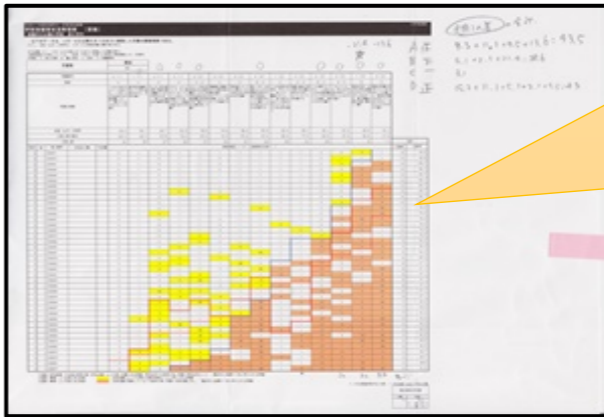
Do

↓

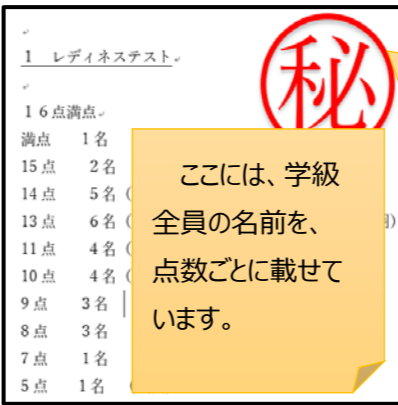
Check

↓

Action



【S-P表による分析】  
 北海道教育委員会主催の「組織力強化会議」で紹介された、より効果的な分析方法。  
 この結果、面積の内容に課題が大きかったため、「量と測定」領域を本校児童全体の重点課題に設定した。



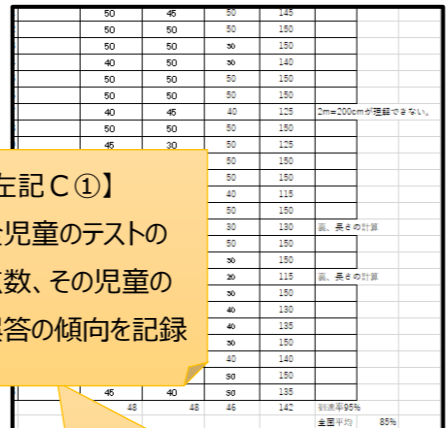
【レディネステストのメリット】

- ① 課題が大きい児童へ補充指導を行い、児童全員が既習事項を把握した状態で重点単元に入ること、児童の苦手意識を軽減する。
- ② 担任だけでなく、重点単元でT2に入る先生にも知らせることで、授業でサポートする児童の優先度が分かる。

ここに、学級全員の名前を、点数ごとに載せています。

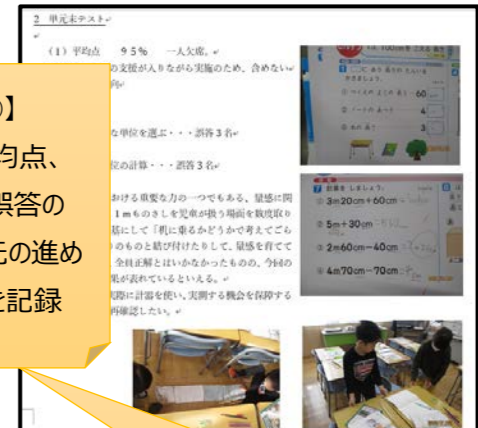
【重点単元とその結果】

学年	単元	配当時数	指導時期	単元テスト期待到達率	学級平均到達率
第1学年	大きさを比べ(1)	5	9月中旬	90	95
第2学年	100cmを超える長さ	7	1月下旬	85	95
第3学年	重さ	9	11月上旬	85	94
第4学年	面積(長方形、正方形)	11	10月上旬	80	83
第5学年	面積(三角形、平行四辺形など)	14	10月中旬	80	85
第6学年	立体の体積	5	10月上旬	84	86



【左記C①】  
 全児童のテストの点数、その児童の誤答の傾向を記録

翌年、この集団の新担任に引き継ぎ、同系統の指導時に生かす。



【左記C②】  
 テストの平均点、全体的な誤答の傾向、単元の進め方の要点を記録

翌年、同学年の担任に引き継ぎ、本単元の指導に生かす。

全学年で平均到達率が期待到達率を上回った。